関西自然保護機構会誌 25（2）：97－98，2003

深泥池自然観察会について
（深泥池の保全のための市民の取り組み3）

深泥池自然観察会　成田研一・石黒真理

Operations of the Mizorogaike-Pond Watchers' Association (Citizens movements for the conservation of the Mizorogaike Pond. 3). Ken-ichi Narita & Mari Ishiguro (*Mizorogaike-Pond Watchers' Association, Kyoto*)

深泥池は，京都市街地の平地にあって誰でも気軽に散歩がてらに訪ねることができます。ここでは10数万年の歴史をもつ浮島の高層湿原だけでなく，周囲の雑木林でも四季を通していろいろな生きものの暮らしや豊かな自然を観察することができます。

この身近な自然の貴重さに気が付かれた田末利治氏が，自然観察会をはじめて20年ほどになります。晴雨に関わらず毎月第三日曜日を観察会の日と定めてずっと実施してきています。観察会といえば，それぞれの季節に特徴的な各地の自然を訪ねる例が多く，この会のように一年中同じフィールドで継続して観察会を続けている例はそう多くはないと思われます。日常の観察で気が付いたことや調査記録，また深泥池をめぐる様々な話題を『うきしま通信』として毎月編集し，参加者や希望者に配布しています。長年にわたる観察の蓄積は，池の自然保護と環境保全に向けて力を入れている「深泥池を守る会」の活動にも生かされてきています。

自然観察会が始まった1980年代は，深泥池に関する情報を一般の市民が受ける機会はほとんどなく，地域に住んでいてもその貴重さを理解している方はごく少数であったと思われます。毎月の観察会がきっかけになり，熱心な参加者の輪は次第に広がり，その年齢層も幼児から80代の高齢の方まで幅広くなってきています。そして最近では，地域の小中学校の総合学習，PTAの活動，市内各地の親子の自然観察グループ，他府県からの修学旅行の班別研究グループの訪問など，池の観察に訪れる人は随分多くなってきました。これらの人たちのために，四季の観察ガイドを昨年作成しました。深泥池を知る入門編として編集したポケットサイズの冊子で，池の横にも置いていますが，池を訪れる人たちに好評のようです。

深泥池は，住宅街に接して存在し，見かけは何の変哲もない小さな池です。この池に春が訪れると，浮島や岸辺は真っ白なミツガシワの花のじゅうたんで覆われます。北国の湿原でしか見られない植物が手の届くところで観察できるのです。約1万年前の最終氷期以降，この温暖な京都で生き残り，大群落をつくっています。ミツガシワの花が終わる頃から開水面には水草の葉が広がりはじめ，ジュンサイやタヌキモを手にとって観察することができます。希少植物のヒメコウホネも黄色の花を初秋まで次々と咲かせて楽しませてくれます。また池岸を歩くと，50余種のトンボが飛び交うのを観察することもできます。晩秋，水草が枯れはじめて広くなった水面には，カモ類などいろいろな冬鳥が訪ねてきます。

関西自然保護機構業績　第334号

周辺の雑木林でも，一月の厳寒期に咲くハンノキからはじまって，早春からは12種類のつつじ科の花が次々と咲き，十月のコウヤボウキまで様々な樹木の花を観察することができます。それぞれが秋には，個性豊かな色とりどりの実りを迎えます。そして，周辺の山々全体が美しく紅葉し，やがて落葉して冬越しの準備に入っていきます。

観察会では，このような自然の変化を楽しみながら，それぞれの季節に植物や昆虫がどのように適応して生きているか，また月毎の変化や成長などを見ています。記録をつけていると，開花や紅葉の時期なども，気象条件の違いで年によりかなり変動することに気が付きます。観察をしている中で，新しい実生の木を見つけたり，今までに見ていないキノコの発生に出くわしたり，過去の記録にないトンボを発見したり，夢中になる子どもたちの中から，大人顔負けのトンボ博士やキノコ博士も生まれてきています。

同じフィールドで，生きものの週毎，月毎，年毎という時間的な変化の観察は，もっと大きく生態系を意識するきっかけにもなるようです。昨年はオオマリコケムシが多く発生したが今年は減少，数年前まではヒシが占有していた水面に今年はオオカナダモが異常に大繁殖する等，水中の盛衰はドラマチックです。浮島のミズゴケ湿原にとってはもちろんのこと，深泥池の生きものにとっては水質の変化，集水域周辺の環境条件の変化が最重要課題で，このような面からも観察を続けていきたいと思っています。

町中で暮らし，日常はほとんど自然と接することの少ない子どもや大人にとって，深泥池は四季折々の自然を膚で感じさせてくれる貴重な存在です。ここに生き続ける氷期からの遺存種の存在は，地球上に続く生命の悠久のロマンを感じさせてくれます。深泥池はこれらの生物だけでなく，南方系の生物も多く分布していて共存している珍しい池だと言われています。しかし，この貴重な自然の遺産が今や危ない状況であると各方面から指摘されています。周辺の開発により水質の富栄養化が進み，人為的に持ち込まれた外来の水草やブルーギルやオオクチバスなどの移入種が勢力を拡大し，在来種の絶滅や激減を引き起こしているからです。これらの調査研究，駆除事業には近隣の大学の研究者が中心になり，地域市民ボランティアも協力し取り組まれています。観察会からも参加しています。その経過や結果は地域市民にも広く伝えられるようになってきています。これには6年前から発足した「深泥池水生生物研究会」が大きな役割を果たしています。

深泥池自然観察会は，深泥池の自然とその歴史をより多くの人に知ってもらうことが，かけがえのない自然遺産である深泥池を未来に引き継ぐ一助となることと確信して，活動を続けています。